



**Data**

監督: ドウニ・ヴィルヌーヴ  
脚本: アーロン・グジコウスキ  
出演: ヒュー・ジャックマン/ジェイク・ギレンホール/ヴィオラ・デイヴィス/マリア・ベロ/テレンス・ハワード/メリッサ・レオ/ポール・ダノ/ディラン・ミネット/ゾーイ・ソウル/エリン・ゲラシモヴィッチ/カイラ・ドリュー・シモンズ

## 👁️👁️ みどころ

『21グラム』(03年)や『ミスティック・リバー』(04年)など、難解だが上質なハリウッド発のサスペンス映画はホントにすばらしいが、ここに、その系譜の名作が誕生! 少女の失踪事件の発生と、それを必死で捜す父親。警察が当てにならないと悟った彼は、法律で禁じられた「自力救済」による追及を始めたが、その異常性は・・・?

容疑者は次々登場するが、どれもイマイチ。刑事が追うそれと、父親がこだわるそれも一致していない。そんな中で最後に浮上してきた、意外な人物とは・・・?

本作による153分間の「頭の体操」は何とも貴重な体験になるはずだ。ドウニ・ヴィルヌーヴ監督に大きな拍手を!

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■難解だが上質の、ハリウッド発のサスペンス映画が! ■□■

最近のハリウッド映画は、『スパイダーマン』『X-メン』などのアメコミもの、マーベルものの「大作」が目立つ。しかし他方で、ハリウッドはハリウッド特有の、難解だが上質のサスペンス映画を発信し続けてきた。アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ監督の『21グラム』(03年)、『シネマルーム4』257頁参照)がそうだし、クリント・イーストウッド監督の『ミスティック・リバー』(04年)、『シネマルーム4』251頁参照)、ジョエル・コーエン、イーサン・コーエン兄弟の『ノーカントリー』(07年)、『シネマルーム18』21頁参照)等々がそれだ。これらの映画は、「アメコミもの」ほどの大量の宣伝がないから、自分の目と耳で注意深く情報を集めなければ、その存在すらわからない。

また、シネコン化された劇場では、人気作から大きなスクリーンをとっていきから、5月5日のこどもの日、TOHOシネマズ西宮OSに朝から集まった家族連れを含む多くの観客の目当ては、『アナと雪の女王』（13年）、『テルマエ・ロマエⅡ』（14年）、そして『相棒—劇場版Ⅲ—』（14年）だった。その人気ぶりは、1回目、2回目の上映は既に売り切れ状態になっていたほどだ。ところが、私がこの日に2本続けて観た『とらわれて夏』（13年）も本作も小さなスクリーンでの上映だし、『とらわれて夏』はガラガラ状態だった。本作についても、私は事前情報をほとんど持たず、チラシとちょっとした新聞紙評だけでこれは必見！と思ったものだ。

物語のスタートは、ある日突然起きた、愛する6歳の娘の失踪事件。それ自体はよくあるサスペンス映画の設定だが、「噂のシナリオ」としてハリウッドのブラックリスト（映画業界人が選定する未製作シナリオの優秀ランキング）2009年度版の4位に名を連ねていたという、アーロン・グジコウスキのオリジナル・シナリオは、私が現在執筆中の『都市計画法の読み解き方』と同じく、複雑かつ難解。『とらわれて夏』はワン・イッシュ映画だった（？）のでわかりやすかったが、『プリズナーズ』は容疑者が2人も浮かびあがってくるうえ、ロキ刑事（ジェイク・ギレンホール）の捜査とは別枠で被害者アナ（エリン・ゲラシモヴィッチ）の父親ケラー・ドーフアー（ヒュー・ジャックマン）がかなり異様な（違法な）犯人捜しの行動をとってくるから、それだけでも話はややこしい。途中で何度もこりゃ一体、いづくに行きついてエンドを迎えるの？と心配したほどだ。そんな本作は当然星5つ。さあじっくり腰を据えて、難解だが上質のハリウッド発のサスペンス映画を楽しもう。

## ■□■割と簡単な事件。当初はそう思えたが・・・■□■

本作の舞台は、ペンシルヴェニア州のある町。凍てつくような寒さの感謝祭の日に、忽然と姿を消してしまったのは、工務店を営むケラーとその妻グレース（マリア・ベロ）の6歳の娘アナと、一つ年上の親友ジョイ（カイラ・ドリュウ・シモンズ）の2人。ジョイは、フランクリン（テレンス・ハワード）とナンシー（ヴィオラ・デイヴィス）夫妻の娘だ。しかし、2人が消える直前、いかにも怪しげなおんぼろのキャンピングカーが付近に停車していたことを思い出した、ケラーの息子ラルフ（ディラン・ミネット）の供述にもとづいて、地元警察が捜査した結果、そのキャンピングカーを発見した若き敏腕刑事ロキが、運転席にいた挙動不審な若い男アレックス・ジョーンズ（ポール・ダノ）の尋問を開始したから、犯人の自白は間近。早々にアナもジョイも発見され、保護されるのでは？

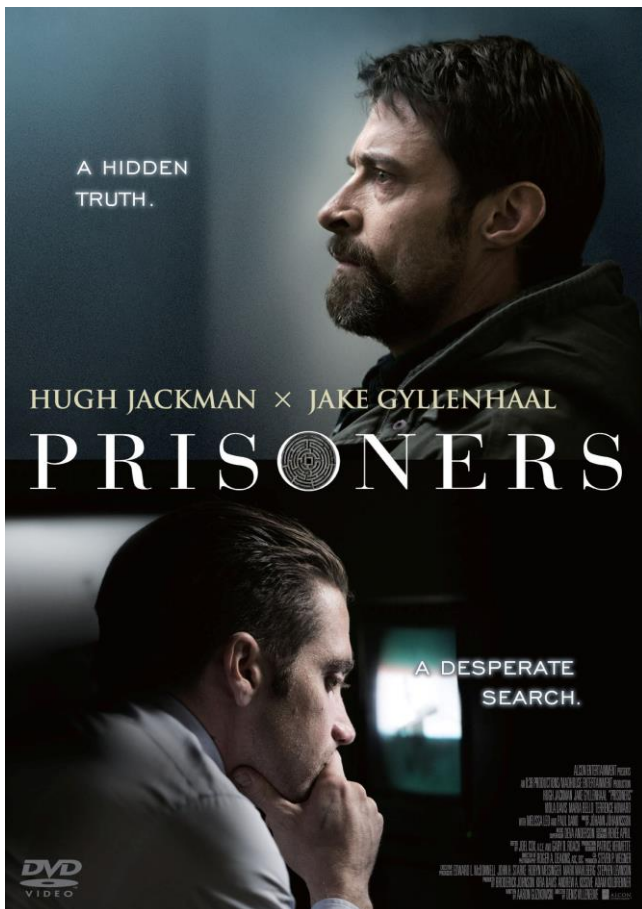
当初はそう思えたが、その後の事態は正反対に。アレックスはアナやジョイの写真を突き付けられても「知らない」の一点張り。その上、キャンピングカーからは少女たちの服の繊維の一つも発見されなかったから、「物証」はゼロだ。もちろん、物証をすべて消してしまうことも可能だが、調べてみるとアレックスは10歳児並の知能しか持っていないらしいから、そんな男にそんな完全犯罪の実行は到底無理だ。すると、中国ならいざ知らず、厳格な法治国家たるアメリカでは、48時間の拘束期限を考え、アレックスは釈放せざる

をえない。今後は、アレックスに的をしぼった捜査ではなく、息の長い任意捜査を継続していくしかないわけだが、そんな悠長なことを言っていていいの？誘拐された、アナとジョイの命はそんなに長くもつもの？

## ■□■警察が当てにならなければ、自分で・・・■□■

フランクリンは捜査は警察に任せるしかないと考える普通の父親だったが、娘を愛する気持ちが人一倍強いケラーは、ロキの尋問が生ぬるいこと、地元警察がアレックスを釈放したことに激怒。報道陣が詰めかけたアレックス釈放の場に殴り込みをかけるほど荒れ狂ったから大変だ。アレックスにつかみかかってアナの居場所を吐けと迫ったとき、ケラーはアレックスの口から、「僕がいる間は、泣かなかった」という呟きをたしかに耳にしたから、ケラーのアレックスが犯人だとの思いは確信に！警察の捜査が当てにならないと考え、このまま事態が進めばアナを生きのまま救出す可能性が遠のいてしまうと確信したケラーは、迷うことなく非常手段を実行！それは、自分でアレックスを拉致、監禁し、暴力的手段に訴えてでも、アナたちの所在を吐かせようということだ。

この手の方法は近代刑法では「自力救済の禁止」とされているし、それ自体が犯罪になる行



『プリズナーズ』 発売日：2014.10.2

価格：DVD¥3,800(本体)+税、Blu-ray¥4,700(本体)+税

発売元：ポニーキャニオン 販売元：ポニーキャニオン

© 2013 Alcon Entertainment, LLC. All Rights Reserved.

為だから、日本では到底考えられないが、アメリカでは思い当たる映画がある。それは、私が交通事故の講演で使うテリー・ジョージ監督の『帰らない日々』(07年)だ(『シネマルーム20』133頁参照)。『帰らない日々』の場合は、警察の捜査とは別に自分で弁護士を雇って犯人捜しを続けていると、実はその弁護士が犯人だったというのがストーリーの妙味だったが、本作に見るケラーの「自力救済」ぶりは常軌を逸している。しかも、ケラーは途中から「こいつを痛めつけて吐かせないと、娘たちは死んでしまう」とフランクリンを強引に仲間引き込んでしまうが、少なくともそれはやめた方がいいのでは・・・。

## ■□■ 自白強要の成否は？他方で有力な別線も！ ■□■

ここで面白いのは、日本では一軒家に住んでいるケースは少なくマンションが多いため、ケラーのようなやり方は容易にできないが、車社会で平屋建てないし2階建ての住居がそれぞれ庭を持って並んでいるアメリカの住宅事情では、個々の家のプライバシーが保たれるため、それが可能だということだ。これは、同じ日に観た『とらわれて夏』でも同じで、脱獄犯が、息子と二人暮らしのヒロインの家に逃げ込み、5日間も共同生活を続けていても、隣人がその異変に気づくことがないわけだ。しかもケラーの場合は、妻や子供たちと現に住んでいる家(一戸建ての家)の他に、今は荒れ果てているものの亡き父親から相続した別の家(一戸建て)を持っていたから、そこがアレックスを監禁する絶好の場所になったわけだ。

アレックスが行方不明になった。そう聞いたロキは、最初にケラーがその犯人ではと疑ったが、ロキは他にもやらなければならないことが山ほどあるから大変。さあ、ロキは捜査の優先順位をどのように？そして、ケラーの素人流のハチャメチャな痛めつけによる自白強要は功を奏すの？

本作は2時間33分と長尺になったが、それは犯人についてアレックス以外の有力な「別線」が2つも登場するためだ。その第1は、ロキが初動捜査の段階で立ち寄ったパトリック・ダン神父(レン・キャリオー)の家の地下室で、ミイラ化した男の死体を発見したこと。神父の話によれば、その男は「子供を16人殺した」と言っていたそうだが、さてロキ刑事の捜査は・・・？また、その男の捜査線からは、アナとジョイの失踪事件との関連性は見当たらなかつたが、さて・・・？

## ■□■ 有力な別線！その2 ■□■

私の見立てでは第1の有力な別線は脚本上少しずさんだが、第2の別線はかなり有力そう。それは、失踪したアナやジョイたちの早期発見を臨むローソク集会で不審な動きをする男を、ロキが発見したこと。その男ボブ・テイラー(デヴィッド・ダストマルチャン)はロキの追跡を強引に振り切って逃走してしまったから、この男の「容疑者性」はかなり濃厚だ。そして、重要参考人とされたこの男の似顔絵を公開すると、事件発生から7日目にボブがショッピングセンターに現われたとの目撃情報が寄せられたから、捜査陣は大喜び。しかも、ショッピングセンターの従業員は車のナンバーまで正確にロキに報告してく

れたから、そこまでわかれば、ボブの自宅に踏み込むことは十分可能だ。

本作では一方の主人公がケラーとなり、他方の主人公がロキとなって、ここまで両者とも大車輪の活躍をしているが、ここで私が疑問に思うのは、なぜロキはいつも1人で行動しているの？ということ。普通刑事は2人でチームを組んで動くはずだが、本作ではロキの捜査は常に1人。それは、ボブの自宅に踏み込んだときも同じだった。しかし、ここまで有力な容疑者とされた男の自宅に踏み込むについては、逮捕令状、搜索令状をとり、複数のメンバーで乗り込むのが普通なのでは？スクリーン上では怪しげな行動をとるボブに手錠をかけたうえで応援を頼んでいたが、たまたまボブの反撃にあわなかったから良かったものの、勝手のわからないボブの家の中であんな単独行動は危険が大きすぎるはずだ。しかも、ロキが拳銃で用心しながら物色した室内には、壁のあちこちに奇怪な迷路のような絵が描かれていたうえ、奥の部屋にはカギがかけられたいくつもの収納箱が置かれていたから、これを開けるのは応援が来てからにするのは当然。そんな捜査の原則を無視した(?)ロキが強引にその箱のカギをこわして開けてみると、その中には何と……。

こころあたりの説明は、パンフレットには書かれているが、私の評論では書かない方がきつといいだろう……。

## ■□■警察の大失態の中、新たな展開も……■□■

警察は容疑者を逮捕するのが仕事だが、容疑者を取り調べて調書をとるのも大切な仕事。その大切な容疑者に自殺でもされようものなら、警察の大失態になるため、容疑者の拘置場には首つりに利用できるようなヒモなどは一切厳禁とされている。他方、取り調べにおける自白強要はもちろん、拷問は論外だから、そのような違法な取り調べを防止するため現在は「取り調べの可視化」が大きなテーマになっている。

そんな目で見ると、ボブの取り調べに見るロキ刑事のやり方は、他の警察官が止めたほど異常。さらに、その混乱の中で、ボブから腰の拳銃を奪われた挙げ句、口に当てたその拳銃で自殺してしまったから、こりゃロキ刑事のみならず、警察全体の失態だ。これにてロキ刑事の栄転がおじゃんになったのは当然だし、ロキ刑事の落ち込みも生半可ではなかった。しかし、そんな状況下、驚くべきことに、自力で逃げ出したジョイが路上で保護され病院に運び込まれたという大ニュースが……。他方、ロキの追及の目を逃れながら、アレックスへの執拗な尋問(常軌を逸した拷問)を続けていたケラーの方も、アレックスから「…………ふたりは迷路にいるよ」という意味不明の言葉を聞くことに。

これによって事態は新たな展開に入ってきたわけだが、依然としてケラーとロキは反目したままだ。病院でジョイに面会したケラーは、医師が止めるのも聞かず「アナの居場所はどこだ？」と執拗に問いただしたが、その中でジョイのある言葉から何らかのヒントをつかんだらしいケラーが、血相を変えて病院を飛び出していったから、ロキはまた忙しくなることに。お前の行き先はわかっているぞ！そう呟きながらロキ刑事はケラーの後を追いかけたが、さてケラーの行き先は？そしてまた、ロキ刑事の行き先は……？

## ■□■またまた意外な人物が！そして、意外な展開が！■□■

本作では冒頭に登場する怪しげな男アレックスが一貫してスクリーン上に登場し、ケラーから執拗な尋問を受け続けるから、その展開から目を離せない。他方、中盤には誰が見ても「これが本命！」と思わせる、これまた怪しげな男ボブが登場するが、彼は自殺してしまうからちょっと期待はずれ……。もっとも、ボブの家の中には迷路の地図や少女たちの血のついた衣服など重要な物証が山ほどあったから、これは犯人追及の足がかりになるはずだ。

そんな状況下、クライマックスに向けて新たに登場してくる意外な人物がアレックスの伯母ホリー・ジョーンズ（メリッサ・レオ）だ。前半から後半にかけてのストーリー展開において、ホリーはあくまでアレックスの保護者という役割しか見せてなかったが、パンフレットによると、ホリーを演じる中年のおばさん女優メリッサ・レオは、「この人が特別なのは“普通の主婦”が秘めた異常性を大変な説得力を持って演じきれるところにある」らしい。ちなみに、「一気に注目を集めることになった『フロズン・リバー』では、あくまでも家族のために、生活のために、日常の延長として犯罪に手を染めていく母親役を熱演した。『ザ・ファイター』ではびっくりするほど下品で乱暴で口の悪い、主人公の母親役。下手な人が演じれば単なるカリカチュアになってしまうこの役が、レオに演じられることによって現実にはいそうな（いるのだが）愛すべき人物となった（この作品でアカデミー賞助演女優賞を受賞）」そうだ。

アレックスが10歳児並の知能しか持たないことは医学上ハッキリしているらしいが、ケラーが責め続けているように彼が少女たちの居場所を知っていれば、それを吐くくらいにはできるはず。しかし、これだけ痛めつけられても謎めいた言葉を断片的にしか発してくれないのは、ホントに少女たちの居場所を知らないからでは……？しかし、彼が何らかのヒントを知っていることはまちがいないさそうだから、ひょっとして事件のキーマン（ウーマン）はこの意外性を持った、アレックスの伯母ホリーなのでは？また、「灯台下暗し」というように、少女たちの監禁場所もアレックスが住んでいたホリーおばさんの家のどこかでは……？病院を飛び出したケラーが車を飛ばして乗り込んでいったのは、ホリーの家だが、彼は一体何の荷物を担いでいるの？

他方、アレックスを家の中に迎え入れたホリーは、当初とは違い少し表情をゆるめ優しくそう。そのうえ、「紅茶を飲むかい？」などと親切にしてくれるが、これって逆に何か怪しそうだ。こんな意外な人物が2時間を過ぎたあたりから、犯人捜しのミステリーのうちで急遽浮上！さて、この意外な人物が見せる意外な展開とは？それは、ここでは書けないので、あなた自身の目でじっくりと！

2014（平成26）年5月12日記